

脳卒中リハビリテーションの臨床実践を支援する



interview 金子 唯史氏 (株式会社 STROKE LAB 代表取締役社長) に聞く

リハビリテーション業界ではエビデンスが重視される一方で、現場ではエビデンスを実臨床に活用できない療法士が多く、必要な情報が必要としている人に十分に届いていない。こう語るの脳卒中のリハビリテーションを解説した新刊『脳卒中の機能回復——動画で学ぶ自主トレーニング』(医学書院)を上梓した金子唯史氏である。同氏が代表を務める STROKE LAB では、臨床実践の際に押さえておきたいリハビリテーションの Tips を SNS を通じて発信している。Web 上に存在する情報は玉石混交な現代において、情報発信を続けるねらいとは。書籍発行の背景や情報発信活動に込めた思いを金子氏に聞いた。

情報のギャップを埋める橋渡し

——まずは書籍『脳卒中の機能回復——動画で学ぶ自主トレーニング』の発行に至った経緯を教えてください。
金子 臨床経験を積み重ねてきた中で、リハビリテーション領域における“情報のギャップ”を感じていました。近年では本領域でもエビデンスが重視され、最先端を走る臨床家や研究者たちが臨床実践の結果を論文にまとめて報告しているもの、そうしたデータを参照し十分に活用できる基礎力の高い療法士が多いとは言えません。

この状況を打破するために、2015年に立ち上げたのが STROKE LAB です。リハビリテーションを行う際に知っておきたい基本的知識を YouTube や SNS 上で発信してきました。情報発信を続ける中で、ブルンストロームステージや FMA (Fugl-Meyer Assessment) などの評価バッテリーの具体的な実施手順や解釈を解説した投稿のビュー数が多いことに気付いたのです。これらは養成課程で必ず習う項目であり、臨床現場では知っていて当たり前とされます。しかし、実際には需要があったのです。この気付きから、現場レベルで本当に必要とされている知見をまとめた書籍の発行に至りました。

——本書では脳卒中の機能評価やリハビリテーションの当事者の自主トレーニング方法などをエビデンスと共に見開き 2 ページで説明することを基本とし、同ページには STROKE LAB が運営する YouTube チャンネルへの QR コードも掲載しています(図)。こうした紙

面の構成としたのはなぜでしょう。
金子 現場の療法士や当事者に実践的に使ってほしかったからです。脳卒中のリハビリテーションを総論的に解説した参考書は一定数ありますが、臨床現場での活用が想定された実践書は多くありません。また、例えば外来では当事者一人にかけられる時間は限られており、その中で機能回復を早めるには、自宅等での自主トレーニングも必要です。そこで、自主トレーニングの指導の参考となるようエビデンスと共に紙面と動画でわかりやすく示したかったのです。

——療法士だけでなく当事者が読んでも実践できる内容になっているのですね。
金子 はい。情報のギャップは療法士と当事者(や家族)の間にも存在しています。現場で「ここを参考にしてください」と活用されることを想定し、本書には「家族もできるトレーニング」といった内容も盛り込みました。

また、自主トレーニングとは単に運動のみを指すのではなく、病態の基礎知識を理解することも含まれます。当事者自身が病態への理解を深めることで、リハビリテーションの効果も変わってくるでしょう。本書ではそうした体を動かすための知識も解説しているため、療法士の方にはぜひ現場での指導の際に活用してもらいたいです。

リアルな共感体験ができる場所

——金子先生は10年以上の臨床経験を経てから STROKE LAB を起業されています。起業の経緯を教えてください。
金子 保険診療での限界を感じて、当事

者の自己負担でリハビリテーションを行う(自費リハビリ)施設として立ち上げました。起業当時は自費リハビリを提供する団体や施設がいくつか出始めていた頃で、本領域が徐々に盛り上がってくるであろうとの予感がありました。自費リハビリのメリットは施術できる日数に制限がなく、長期にわたリリハビリテーションを行える点です。

また自費リハビリ事業に加えて、療法士向けの講習会を開催する教育事業も起業当初から開始しました。いくつかの書籍の翻訳に携わったことで病院主催の講習会に講師として呼ばれるようになり、教育にも需要があることに気がきました。

——現在は療法士向けにリハビリテーションの技術などを解説する講習会やセミナーはさまざまあります。他の講習会との違いはどういった点ですか。
金子 同じ時間や空間を長期間(半年以上)共有する共感体験を重視し、実地/オンラインで双方向なやりとりが行える点です。臨床現場においてエビデンスは重要であるものの、リハビリテーションの対象は感情を持った人間であり、エビデンスを押さえてマニュアル通りに行うだけでは当事者の総合的な支援にはつながりにくい。論文やセミナーを受動的に読む・受けるだけでなく、当事者の感情の機微に配慮した情報の伝え方や筋肉の反応を直接手で感じ取ることといった人間中心のアプローチを学べるよう工夫しています。

また、SNS の発達によって情報発信が容易になり、リハビリテーションの要点を解説する投稿が見受けられます。Web 上に存在する情報は玉石混交ですが、取捨選択を正しく行えるなら有料級の知識を無料で学べる時代です。そうすると、相対的にリアルな共感体験ができる場所の価値は上がってくるかと想定していました。弊社の講習会が500人以上の修了者を輩出できたのは、われわれが重視する共感体験が評価されているからでしょう。

金子 大なり小なり自らが置かれている環境への不満や悩みは尽きないと思います。それらを解決するには自分が頑張るだけでなく、上司や先輩・後輩、当事者と向き合って対話してみてください。その際、感謝の気持ちを忘れずに物事をポジティブにとらえてみると良いでしょう。

本書は STROKE LAB を起業しておよそ10年の臨床知をまとめた集大成です。第1章の症例紹介から入り、脳卒中の基礎知識→評価→自主トレーニング→当事者の本音という若手療法士や当事者に読んでほしい順に目次建てを構成しました。そうした本書に込めたストーリーをぜひ感じ取ってください。(了)

●かねこ・ただふみ氏

2002年に作業療法士免許を取得後、近森リハビリテーション病院に入職。04年から順大附属順天堂医院に勤務する。15年株式会社 STROKE LAB を設立し、22年より現職。自費リハビリ事業だけでなく若手療法士の教育や登録者計7万人超えの YouTube チャンネル『STROKE LAB ニューロリハビリ研究所』『脳リハ.com』などを通じた情報発信にも注力する。著書に『脳卒中の動作分析』『脳卒中の機能回復』(いずれも医学書院)など。X (旧 Twitter) ID : @thinkable77

STROKE LABの YouTube チャンネルはこちらから



当事者のニーズを個別に解決！自主トレーニングの新しいカタチ

STROKE X RECOVERY

脳卒中の機能回復

動画で学ぶ自主トレーニング

執筆 金子唯史 執筆協力 丸山聖矢

脳卒中患者のリハビリに携わる療法士に向けた革新的なガイドブックが誕生。本書は30時間に及ぶ YouTube 動画と連携し、療法士が患者に対して、より個別化された自主トレーニングの提供や実践的な説明、指導を行うための手引き書となっている。機能回復に必要な情報や評価手順、家族でも実施可能なトレーニングなど、療法士や患者家族が知りたい情報も豊富に収載。学生の臨床実習から現場の療法士まで幅広い層に最適な一冊。

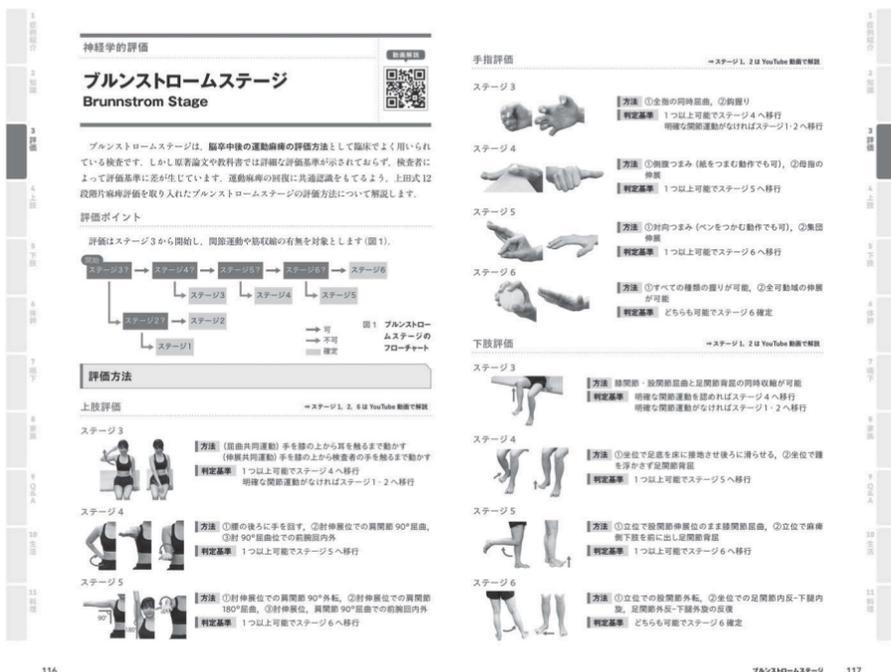
目次

症例紹介/脳卒中の基礎知識/評価/
上肢の自主トレーニング/下肢の自主トレーニング/
体幹の自主トレーニング/嚥下の自主トレーニング/
家族もできるトレーニング/Q&A/
生活アイデア/料理



書籍の詳細はこちら

医学書院



●図 『脳卒中の機能回復——動画で学ぶ自主トレーニング』の紙面サンプル